

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

第31回

2歳馬の大半が患う IADとは？

競走馬の生活環境が、
罹患率70%の原因のひとつ

これまで2回にわたって若馬、とくに2歳馬の健康について解説してきたが、今回は最近とくに注目されている、もうひとつの疾病を取り上げたい。お話ししたくのは、引き続きJRA馬事部の草野寛一さんだ。

「実は2歳馬の大半、70%から80%くらいの馬が罹っていると考えられている病気があります。炎症性下気道疾患(Inflammatory Airway Disease: IAD)とよんで、喉のずつと奥、肺に近い気管におきる炎症を総称したものです」

気管に炎症ができるので、咳が出たり、あるいはうまく酸素を取り込めずに能力を十分に発揮できない、いわゆるプアパフォーマンスの原因になったりする。このあたりは前回紹介した咽頭リンパの過形成と似た事情になる。

しかし、このIAD、70%とか80%という罹患率の高さは驚くべきものだが、それはなぜなのだろうか。その理由は、環境が発症の原因のひとつに挙げられる

からだ。

「競走馬は厩舎の馬房で生活しているわけですが、もともと馬は広々とした空気の綺麗な場所です。動物です。その馬にとつて、実は馬房という環境そのものが、必ずしもいいものではないというのは、よく言われていることなんです」

馬房は換気も難しいし、床にはワラが敷かれているので、埃が多い。おしっこは馬房の中にそのまましてしまうし、そのような環境の中で飼葉を食べるので、アンモニアも吸い込みやすい。馬というのはアレルギー性の気管支炎になりやすい動物でもあり、多くの馬がこの疾患にかかる原因のひとつになっているというのだ。

競走馬にとつて 宿命ともいえる病気

馬房の環境がIADの原因のひとつと言われても、馬房自体をなくしてしまうわけにはいかない。馬房というシステムの中で、できるだけ馬に優しい、馬の健康を害さない環境を作ることが大切になる。

「現在では馬房で加湿器を動かしたりエアコンを入れたり、できるだけ埃が立たないように、空気が綺麗になるようにと気を配っている厩舎も少なくありません。IADはあまり一般には知られていませんが、ほとんどの馬が罹っていると考えられていることもあって、調教師さんたちがとても気にしている病気でもあるんです」

実際に、この病気のいちばんの治療法は空気のいいところに行くこと、なのだろう。綺麗な空気の中で過ごせば、数日で炎症は治まると草野さん。しかし、現役の競走馬では、なかなかそうもいかない。

「ですから、現実問題としては、やはり薬ということになります。気管支拡張剤は、この病気の治療薬として海外の馬にはよく使われているものです。ほとんど馬がかかる病気なので、ある意味、手放せない薬なんです。ほかに消炎剤や抗アレルギー薬、まれに抗生物質なども使います」

花粉症の事情と似ているんです、と草野さんは言う。花粉症の人はスギ花粉が飛んでこない場所に行くのがいちばんい

いけれど、それは現実的に無理な話。なのでスギ花粉の飛んでくる場所で、花粉症の薬を飲む。IADの場合も同じで、薬に頼らざるを得ない。

「ほとんどの馬が罹っているという、えっと思われるかもしれませんが、人間でも五体満足なアスリートはほとんどいないでしょう。たいてい体のどこかに問題を抱えています。競馬も同じです。IADは競走馬にとつては宿命的ともいえる病気ですが、馬たちはそれだけ厳しいところで戦っているということなんです」

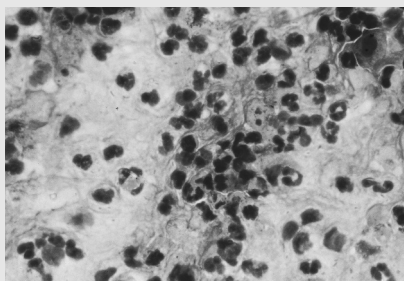
講師

草野寛一さん
JRA 馬事部 獣医課



案内人: 辻谷秋人
text by Akihito Tsujiya

JRA原図



気管液の細胞診で普段見られない好中球が多数出現していると、IAD罹患と診断される